

外国語学習における学力の伸長と 自己分析の変化の相関について

— 学力別観点から —

小 森 道 彦
藤 澤 良 行

1 はじめに

本論文は四年制女子大学英米文学科 2001 年度入学生に対して行った自己分析と学習動機についての論文「外国語学習に関する自己分析と動機の研究—学力別観点からの英米文学科新入生の実像」(藤澤・小森(2002))の続編に当たるもので、継続的な追跡調査の報告・検証である。

先の論文の主眼は、四年制女子大学英米文学科 2001 年度入学生がどの程度の英語学力を持ち、自分の英語学力をどのように自己分析しているか、またいかなる動機を持って入学してきたか、そしてその自己分析と動機はどのような相関関係にあるかに関して、因子分析など統計処理により分析・考察するものであった。その後同学生に対して、時期を経て継続的に自己分析のアンケートを行い、さらに英語学力テストも実施してきた。その結果を元にして本論文は、同学生が入学後約 2 年経過した段階で、英米文学科のカリキュラムを通して英語学力をいかに伸ばしてきたか、そして自分の英語学力に対しての自己分析はどのように変化したかを統計的手法を用いて考察するものである。

同時に 1・2 回生に現在配当されている英語学力伸長を目指すカリキュラムがいかに機能しているのか、改善すべき点はどこにあるのかに関しても言及したい。英米文学科のカリキュラムは、現在のところ二つの段階に分かれ、1・2 回生ではおもに英語の四技能を十分に習得することに重点を置き、大学入学までの知識を再整理することを目的として編成されている。1・2 回生の段階で英語の確かな運用能力を身につけることは、専門科目を学ぶ上での重要な基礎固めと位置づけることができる。

2 入学時の調査

この章では、藤澤・小森(2002)の繰り返しになるが、今回の比較対照を明確にするために、まずは調査対象となる学生の入学時の英語学力に関する特徴を挙げる(詳細は藤澤・小森(2002)を参照のこと)。

調査対象は四年制女子大学英米文学科 2001 年度入学生 105 名である。学力評価には G-TELP (国際英検、General Tests of English Language Proficiency) (Level 3)¹を使用し、入学時に試験を行った。その結果を総得点順に約 35 名ずつの上位・中位・下位の三群に分けた(表 1)。

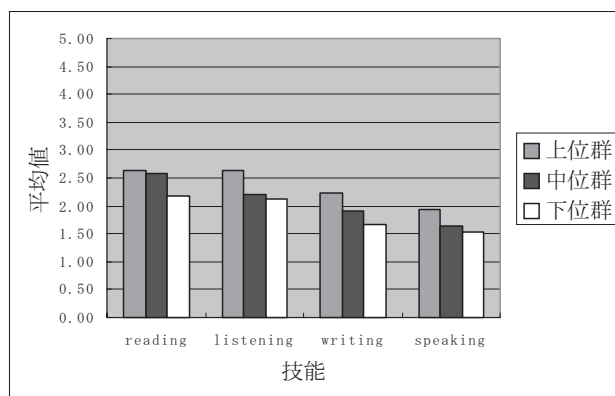
表1 2001年4月実施のG-TELPの結果

	上位群	中位群	下位群	全体
平均	165.71	135.86	110.12	137.48
標準偏差	18.51	7.12	13.25	26.43
最大	225	148	125	225
最小	149	126	60	60
標本数	35	36	34	105

(藤澤・小森(2002:25))

さらに質問用紙によるアンケート(Appendix 参照)によって、学生自身が自分の英語学力をどの程度だと自己分析²しているか、reading、writing、listening、speakingの四技能別に1~5の5段階のスケールで回答してもらい、その結果を上記成績別の三群で分類した(図1)。以上のデータが今回の追跡調査の出発点となるものである。なお本論文で用いる成績別の三群は入学時の結果での分類を継続的に使用する。

図1 各群における自己分析の結果(2001年4月)



(藤澤・小森(2002:26))

3 2 回生終了時の調査

3-1 2002年12月実施のG-TELPについて

(1) 受験者

四年制女子大学英米文学科2回生82名(当日の受験欠席者および提携大学への留学生を除く)を調査対象とした。

(2) テストについて

英語学力を評価するのに2001年4月に実施したものと同一問題のG-TELP(Level3)を使用した。実施時期は2002年12月で、入学時から約2年経過した段階での英語学力調査ということになる。結果は表2である。なお分析にはExcel98(Macintosh Edition)を使用した。

表2 2002年12月実施のG-TELPの結果

	上位群	中位群	下位群	全体
平均	195.17	174.28	148.22	173.34
標準偏差	27.52	30.35	27.05	34.15
最大	263	219	206	263
最小	143	111	103	103
標本数	30	25	27	82

3-2 自己分析に関して

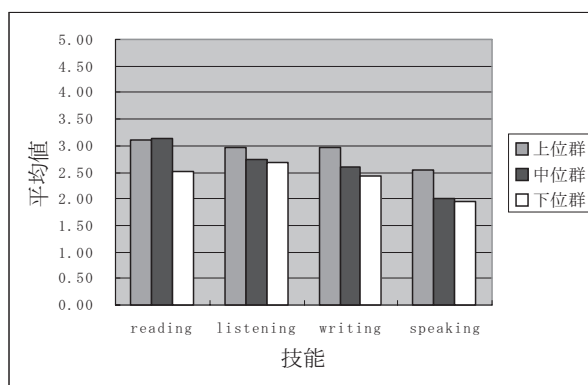
(a) 調査方法

G-TELP実施後の2003年1月に同学生に関して、2001年のものと同様の調査を行い、質問用紙を用いて同じ質問項目を5段階のスケールで、記名式で回答してもらった。入学時から約2年を経過した時点での英語学力を自分としてはいかに捉えているかが表れている。

(b) 調査結果

入学してから約2年経過した時点での自己分析を三群別に表すと図2になる。先に挙げた図1と比較すると、各群の全ての技能において自己分析の値が高くなっていることがわかる。次章で具体的な比較・考察を行う。

図2 各群における自己分析の結果（2003年1月）



4 二回の調査結果の比較・考察

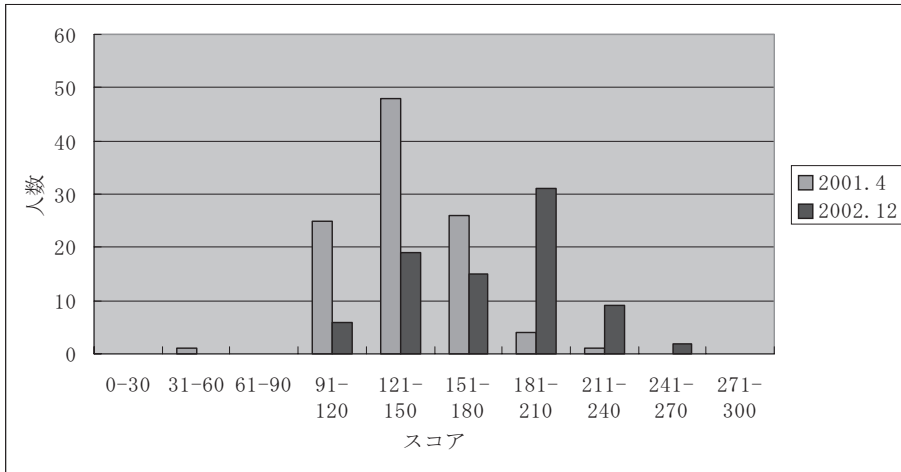
4-1 G-TELPに関して

2001年4月に実施したG-TELPと、2年の間を経て実施したG-TELPの結果について検討する。

(a) 全体の成績の異同

階級幅を30点とし人数を度数としたグラフを見ると、2001年4月段階で135.5点にあった最頻値が、195.5に移動している（図3）。先に述べた表1と表2で比較すると、全体の平均点が137点から173点に40点近く上昇していて、これが最頻値の移動として表れている。個人別に見ても、2001年度の成績から下がったものは、82名のうち3名しかいなかった。

図3 G-TELP (total)



G-TELPで計測できる範囲の技能別に見ても、成績の伸びはバランスよく表れている。以下のグラフ（図4-1、4-2、4-3）は技能別に二回分の成績を比較したもののだが、いずれも最頻値が2~3階級右に移動し total の伸びと同様の伸びを示している。

図4-1 G-TELP の比較 (grammar)

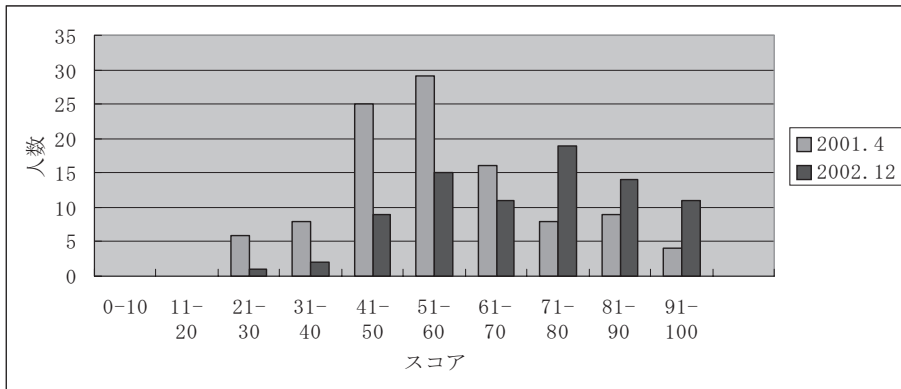


図4-2 G-TELP の比較 (listening)

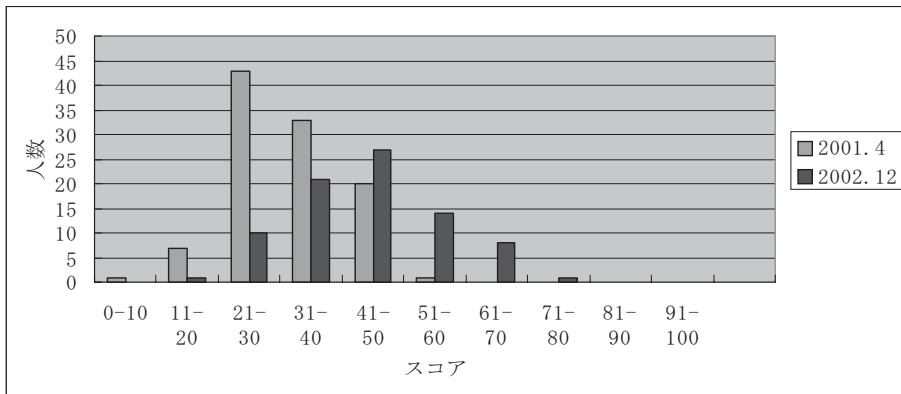
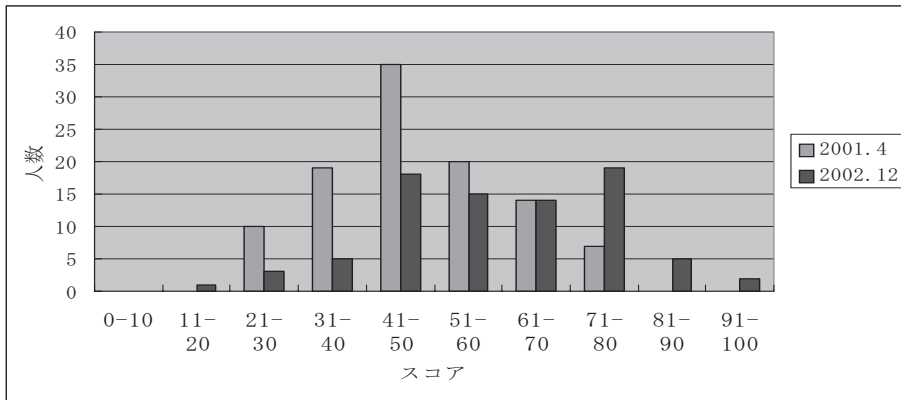


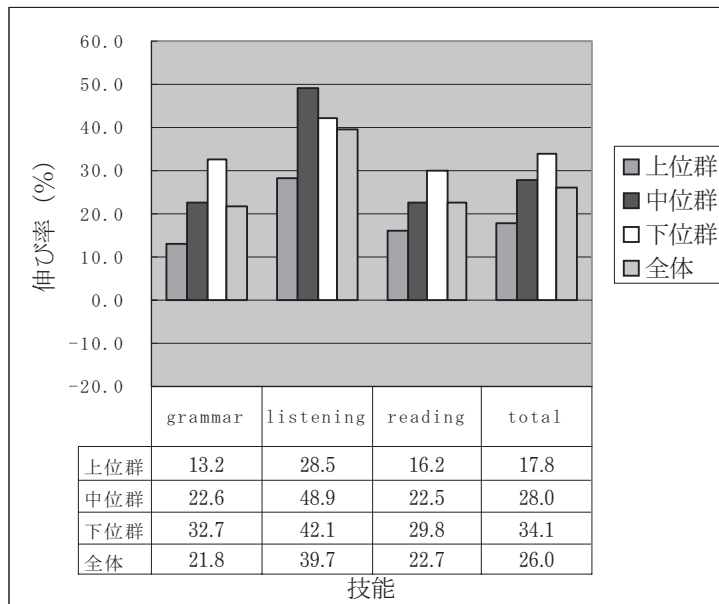
図 4-3 G-TELP の比較 (reading)



(b) 三群別での伸びの比較

技能別に各群の伸びを示したのが図5である。ここで示した伸び率(%)とは、各技能の平均得点差の前回平均得点に対する割合とする。全体としては listening の伸びが最も高く、ついで reading の順である。grammar の伸びが最も低い、これは二回目に実施した試験の grammar の平均がほぼ 70 点で最も高得点であること、受験者に満点の者が数名いることを考えると、grammar については、G-TELP (Level 3) では、上位の学生の成績の伸びを適正に捉えることができなくなった可能性がある。

図 5 技能別の各群の伸び



各群別に見ると、grammar、reading においては下位群の伸びが最も大きく、listening については中位群の伸びが最も大きい。上位群は G-TELP (Level 3) の限界はあるというもの、

伸び率はいずれの技能についても最も低い。後で述べるが、カリキュラムを改革する上で、上位群の伸び率の低さは考慮しなくてはならない。

二回実施した G-TELP を通して得点や伸び率の推移を見ると、以上のように英語学力は着実に伸びたという結果が得られる。ただし次のような問題点を考慮する必要もある。第一に、2年間の間隔はあるが G-TELP という試験に対する学習効果があるのではないかという点である。同一試験問題を用いることで、二度目の試験では既に同様の試験を受けていることの「慣れ」が得点上昇に作用している可能性も考えられないわけではない。第二に、2001年4月段階と2002年12月段階で受験者の数が105から82に減少していることも考慮すべきであろう。データの欠損率との関係に関しては判断が難しいところである（角岡（2002）参照）。

4-2 自己分析の比較

先に述べたように、自己分析の調査は、2001年4月、2002年12月に同じ方法で行った³。全体としての結果を一覧にしたのが次の表3である。ここでは二回の調査での平均ポイントの差を伸びと考える。基本的にいずれの技能においても、自分の能力が伸びたという意識をもっていることがこの表からわかる。技能別には writing 以外の伸びが約 0.5 ポイントであるのに対し、writing は 0.75 ポイントで特に力がついたという意識が強い。

表3 2年後の自己分析の伸び（全体）

	<u>reading</u>	<u>listening</u>	<u>writing</u>	<u>speaking</u>
(a)2001.4	2.48	2.33	1.94	1.71
(b)2001.7	2.67	2.69	2.38	1.95
(c)2002.12	2.93	2.81	2.69	2.20
(c)-(a)	0.45	0.48	0.75	0.49

この結果を成績の群別に見てみよう。二回の調査で得られた技能別の自己分析の数値（1～5）について、各回の平均の差を群別に表にしたのが表4である。reading は中位群、listening、writing は下位群、speaking は上位群が最も変化の大きいことがわかる。下位群は入学時に強い音声志向の動機を持っており（藤澤・小森（2002））、listening の伸びはその結果の表れと考えることができるが、speaking が伸びたという意識は比較的弱い。上位群は writing、speaking のような発信系の技能での伸びが大きいですが、reading、listening については実感としては大きな伸びは見られない。中位群はそれぞれ約 0.5 ポイントずつの堅実な伸びを示しているが、speaking に関してはあまり数値に増加がないので、依然として自信のなさが見られるといえる。

表4 三群別の自己分析の伸び

	<u>reading</u>	<u>listening</u>	<u>writing</u>	<u>speaking</u>
上位群	0.46	0.34	0.74	0.61
中位群	0.55	0.52	0.68	0.35
下位群	0.33	0.57	0.78	0.43
全体	0.45	0.48	0.75	0.49

4-3 G-TELP の成績の伸びと自己分析の変化の相関関係

では、G-TELP の成績の伸びと自己分析の変化の間には相関関係があるのだろうか。重なりのある reading と listening の技能について相関を調べた（表 5-1、5-2）。

表 5-1 reading

	G-TELP伸び率(%)	自己分析の伸び
上位群	16.2	0.46
中位群	22.5	0.55
下位群	29.8	0.33

表 5-2 listening

	G-TELP伸び率(%)	自己分析の伸び
上位群	28.5	0.34
中位群	48.9	0.52
下位群	42.1	0.57

reading に関しては相関係数 $r = -0.603757$ でかなり強い負の相関がある。これは、中位群は学力が伸びたという意識は高いがその割に得点の伸びは少ないこと、下位群は学力の伸びの意識は弱い、それに対して得点は比較的伸びたことが負の相関につながったと考えられる。中位群がこうした意識と現実のズレをもつことは、授業の際に教員が念頭に置くべきであろう。

listening については相関係数 $r = 0.85962$ で、自分の学力が伸びたという意識と実際の成績の伸びとはほぼ比例することがわかる。

5 まとめと展望——英米文学科カリキュラムの改善に向けて

大学入学時と 2 回生の終了時で学生の成績が顕著な伸びを示したことは、総論的にはよい結果であったと思われる。しかしいくつかの改善すべき点も同時に明らかになった。

個別的に見ると、reading の自己分析の数値は特に中位群において伸びが大きいが、実際の得点の伸びが他の技能に較べると伸び率が低いことに注目したい。今後の改善点としては、この結果を学生にフィードバックすることで、もっと reading に力を入れる必要性を再認識してもらう必要がある。これは、相対的に（日本語にせよ英語にせよ）学生の読書量の不足による reading 力不足を露呈している側面もある。多読の必要性をもう一度強調しておきたい（藤澤・小森（2001））。

また、全般的に上位群の伸びが他群に比べて低いことを考えると、上位群の学生をさらに伸ばすことに配慮したより魅力に富むカリキュラムも今後工夫しなくてはならないだろう。

G-TELP の得点が伸びたこととの関連でいえば、現在のカリキュラム編成は、英語学力伸長をめざす点から見れば、数値の上からもほぼ適切なものといえることができる。一般的に、英語に限らず、大学生の課外での学習時間がきわめて少ない現状⁴を考えると、学生の英語学力の伸長に大学のカリキュラムが寄与する割合は大きい。

今後の課題として、入学者に対する継続的なデータ収集と年度の推移を経たデータの蓄積が必

要である。さらに、柔軟なカリキュラム編成を行う上で、本調査のような量的研究だけでなく個別面接などによる質的研究も必要であろう。このような研究の成果が学科の専門性を方向付ける上で重要な手がかりになると思われる。

注

- 1 G-TELP は General Tests of English Language Proficiency の略で、San Diego State University の International Testing Service Center (ITSC) がテストプログラムの開発を行っている。試験は Level 1～Level 4 まであり、本調査では Level 3 を用いている。Level 3 (Basic English in Normal Communication) は grammar (22 問), listening (24 問), reading & vocabulary (24 問) で構成され試験時間 70 分で解答する。(G-TELP 日本事務局: <http://www.g-telp.jp/>)
- 2 本論文では「自己分析」という用語を使用しているが、同様の意味で「自己評価」(self-evaluation, self-assessment) が用いられることがある (Cf. Richards et al. (1992:327))。
- 3 2001 年 7 月にも同様の調査を行ったので、参考のために表 3 に加えた。
- 4 総務省統計局の調査によると、大学生の課外の勉強時間は 41 分という結果が出ている。(平成 13 年社会生活基本調査 (総務省統計局、平成 14 年 9 月 30 日公表、<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2001/jikan/gaiyoj.htm>))

references:

- Brown, James Dean. 2001. *Using Surveys in Language Programs*. Cambridge University Press.
- 藤澤良行, 小森道彦. 2001. 「Extensive Reading の理論と実践」『大阪樟蔭女子大学論集』第 38 号. 67-81.
- 2002. 「外国語学習に関する自己分析と動機の研究—学力別観点からの英米文学科新入生の実像」『大阪樟蔭女子大学論集』第 39 号. 23-35.
- 角岡賢一. 2002. 「深草学舎英語共通テスト伸長度分析」『英語英文学論叢』第 21 卷. 71-89.
- 金谷憲 編著. 2003. 『英語教育評価論』. 河源社.
- 清川英男. 1990. 『英語教育研究入門—データの基づく研究の進め方』. 大修館書店.
- 清川英男, 濱岡美郎, 鈴木純子. 2003. 『英語教師のための Excel 活用法』. 大修館書店.
- 森田勝之. 1998. 『国際英検 G-TELP 受験のための公式ガイドブック—レベル 1・2 級』. 金星堂.
- 中田賀之. 1999. 『言語学習モチベーション—理論と実践』. リーベル出版.
- Oxford, Rebecca L. (ed.). 1999. *Language Learning Motivation: Pathways to the New Century*. Honolulu, HI: Second Language Teaching and Curriculum Center, University of Hawaii Press.
- Richards, Jack C., John Platt, & Heide Platt. 1992. *Longman Dictionary of Language Teaching & Applied Linguistics*. Longman.
- Seliger, Herbert W. & Elana Shohamy. 1989. *Second Language Research Methods*. Oxford University Press. (邦訳: 土屋武久他 (訳). 『外国語リサーチマニュアル』. 大修館書店. 2001.)

Appendix「調査用紙」(自己分析部分)

2001 年度入学生アンケート

このアンケートは新しいカリキュラムをスタートする上で、そして今後の英米文学科の方向を模索していく上で大切な基礎資料となりますので、できる限り正直にお答え下さい。そしてカリキュラム、動機など授業研究に対しての基礎データにも使わせていただきたいので、ご協力下さい。

A あなた自身の基礎データについて (空欄に記述して下さい)

- 1 学籍番号 _____
- 2 名前 (読み方) _____ (_____)
- 3 出身高校 (所在地) _____ 高校 (_____)
- 4 入学形態 (あてはまるものに○をつけて下さい)
 - 1 外部特別推薦 2 内部特別推薦 3 一般推薦 4 一般入試前期
 - 5 一般入試後期 6 センター入試前期 7 センター入試後期
- 5 留学経験 (海外経験 何年生でどの国にどのくらいの期間行ったか)
- 6 英語の検定 (英検、TOEIC、TOEFL など) 現在の資格

B 現在の英語力についての自己認識 (得意度) (あてはまるものに○をつけて下さい)

- 7 reading～自分の読む力の自己評価 (辞書なしで、80%以上理解できる)
 - 1 初歩的な内容の英文 (中2)
 - 2 初級程度の内容の英文 (中3、高1) (教科書英語 I レベル)
 - 3 中級程度の内容の英文 (高2・3) (教科書英語 II レベル)
 - 4 入試に出題される英文 (教科書英語 Reading レベル)
 - 5 上級程度の内容の英文 (英字新聞雑誌などの論説)
- 8 listening～英語を聴いて理解する力の自己評価 (80%ぐらい理解できる)
 - 1 ほとんどできない 2 簡単な挨拶程度 3 単純な内容の会話
 - 4 複雑な内容の会話 5 ニュース、映画やドラマの中で話される会話
- 9 writing～自分の意志や考えを英語で書き表すことへの自己評価
 - 1 ほとんどできない (10%まで) 2 わずかだけできる (30%まで)
 - 3 ある程度できる (60%まで) 4 かなりの程度できる (80%まで)
 - 5 ほとんど問題なくできる (81%以上)
- 10 speaking～自分の意見や考えを英語で話せることに対する自己評価
 - 1 ほとんどできない (10%まで) 2 わずかだけできる (30%まで)
 - 3 ある程度できる (60%まで) 4 かなりの程度できる (80%まで)
 - 5 ほとんど問題なくできる (81%以上)